The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『有善女物語』考
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	語文. 2000, 74, p. 12-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68962
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『有善女物語』考

箕浦尚美

はじめに

室町期の物語の一つ『有善女物語』は、次のような内容である。[1]

大唐并州の有善女は、善導の教えを受けた信心深い女性である。念仏を勧めても聞き入れない夫有悪婆羅門に愛想を尽かし、家を出て親のもとに身を隠す。追いかけてきた男に対して親は、尼になった娘に会いたければ入道になれと言う。その言葉に従って男は剃髪する。女も尼となり、ともに家に帰る。夫は、妻の勧めで朝夕の鐘ごとに「南無阿弥陀仏」と唱えるようになる。しかし、信心がなかったため、死んで地獄に堕ちた。地獄の釜の罪人を掻き混ぜようとした獄卒の鉄叉が、たまたま釜の蓋にあたって音をたてた時、男はそれをいつもの鐘の音と聞きなして、「南無阿弥陀仏」と唱えた。それによって、地獄の罪人はみな救われた。男は蘇生してこの有様を語り、心を改め、有善女とともに往生を遂げた。

中国山西省の并州は、唐代初期に浄土教を始めた曇鸞、その教えを受け継いだ道綽、そしてそれを大成させた善導等が活躍した地で、『宝物集』にも、「并州にむまるゝものは、七歳以後弥陀を念ずるがゆへに、かならず極楽にゆくなど申き。」（『新日本古典文学大系』三四二頁）と記される仏教のさかんな土地柄である。[2] 善導の教えを受けたという女性の信仰のあり方を描いた『有善女物語』は、真宗の談義書として用いられた草子である。

本稿では、この物語の源泉となったと思われる説話を検討し、その説話の享受のあり方を分析することによって、『有善女物語』の生成する背景を考察する。

一　『有善女物語』の源泉となる説話

『有善女物語』の源泉には、地獄で獄卒の鉄杖の音を鐘の音と聞き誤って念仏を唱えて救われる男の話があると考えられる。例えば、『大鏡』道隆（『新編日本古典文学全集』二五四頁）に、

御病づきてうせたまひける時、西にかき向けたてまつりて、「念仏申させたまへ」と、人々のすすめたてまつりければ、「済時・朝光なんどもや極楽にはあらむずらむ」と仰せられけるこそ、あはれなれ。つねに御心に思しならひたることなればにや。あの、地獄の鼎のはたに頭うちあてて、三宝の御名思ひ出でけむ人のやうなることなりや。

とあるのは、はっきりと音がしたとは記されてはいないが、「頭うちあて」たことによって鼎が音を立て、「三宝の御名」を思い出した話

であると解釈すれば、『有善女物語』の夫が地獄で念仏を唱えた話と同趣向であると言える。「頭うちあてて」は、『有善女物語』とは異なり、他に例もなく、『大鏡』の直接の典拠は不明であるが、この説話の淵源は中国の仏書に求められ、日本での受容例も多い。以下、それらを比較することによって、『有善女物語』の依拠した説話を絞り込んでゆくこととする。まず、中国の例を①～③に示す。

①『経律異相』巻四十五〈女庶人部下〉　婦人化婿戸上懸鈴使聞声称仏後免地獄　七（『大正新修大蔵経』五三、二三六頁）

昔有人不信。婦甚事仏。婦白婿曰。人命無常可修福徳。婿無心懶堕。婦恐将来入地獄中。即復白婿。欲懸一鈴安著戸上。君出入時。振鈴作声称南無仏。婿曰甚善。如是経久。其婿命終。獄卒扠之擲鑊湯中。扠振鑊作音声。謂是鈴声。称南無仏。獄官聞之。此人奉仏。放令出去。得生人中〈出雑譬喩経也〉

『法苑珠林』巻三十四（『大正新修大蔵経』五三、五五一頁）にも「譬喩経」を出典としてほぼ同文で採録されている。現在の『譬喩経』『雑譬喩経』にはこの話は見出せない。信心深い妻が出入りする戸の上に鈴を懸け、その鈴に触れた時に夫に「南無仏」と唱えさせるのが特徴である。

②『法華伝記』巻五　宋法華台沙弥　十九（『大正新修大蔵経』五一、七〇頁）

宋法華台者。釈法宗帰心後。開祐昔所住。以為精舎。因誦号法華台也。凡諸州志諷誦者。群集此台。衆将三千。諷誦成喧雑。大衆評議。分十二時。以定衆限。打揵搥為剋限。諷誦不絶。其業常存。時一沙弥。従遠方而来。愚戇不識文句。昼夜志諷誦。望入衆限。然天性懶堕。亦不了剋限。大衆悲愍愚。汝以暁更揵搥声為期。先習諷誦功方成。堪為衆限。一夏誦習。纔得両三行。衆人軽慢。所誦甚少。不楽人衆。沙弥悲愁。以暁更鐘声為期。日日専志流涙慚先業。欲投身於山崖河淵。即到高崖。放身而投悶絶。依先業入鑊湯地獄。獄卒以杖打罪人。鉄杖触鑊縁。響声似昔揵搥。沙弥憶本志。自能不覚。誦法華題目。獄中罪人。皆坐蓮華。地獄変作涼池。獄卒嘆未曽有。将沙弥奏閻魔王。王言。沙弥有余命。還閻浮提尽其志。聞是語已。如眠臥而覚。身無損壊。還到台説此因縁。衆或信不信。沙弥至心発願。我冥所見不空。即業障軽微。一部文義。自然照了。発願已行道誦経。一部文義。自然誦通。衆聞所誦。併伏膺。上座沙弥為僧。於諷誦衆為上首

暁の鐘が鳴る時に諷誦していた法華台の愚鈍な沙弥は、諷誦する能力が十分でないことを悲愁して自殺し、地獄に堕ちたが、獄卒の鉄杖が釜にあたった音を揵搥の音と聞き違えて法華題目を唱え、蘇生するという話である。『有善女物語』と比較すると、刻限を知らせる鐘（揵搥）の音によって名号を唱えたという共通点があるが、法華題目である点、夫婦の話ではなく一沙弥の話である点などに懸隔がある。

③『三宝感応要略録』巻上第十九　信婦言称阿弥陀仏名感応〈出外国賢聖記〉（『大正新修大蔵経』五一、八三二頁）

昔天竺阿輸沙国中。有一婆羅門。愚痴不信。悪業厳身。其婦浄信。解念仏定。婦毎勧夫曰。汝可念無量寿仏。夫不随。此婆羅門多欲愛婦。情深染著。不知厭足。時婦曰。夫婦如双羽。汝如何不似我行。既不随我心。我亦汝不随。衆不順情。時婆羅門曰。我愚痴故。不能持汝行。将如何。婦曰。汝定一時。我修念仏定

訖撃金鼓時。将唱南無阿弥陀仏。入寝屋方交臥。婆羅門如言而行。三年後依微疾而卒。脇下尚暖。婦疑不葬。五日方活。悲泣謂婦言。吾死入鑊湯地獄。羅刹婆以鉄杖打罪人。打動鑊縁。即謂汝金鼓声。不覚高声唱南無阿弥陀仏。尓時地獄如涼池。蓮花弥満其中。声所及罪人皆生浄土。羅刹白王。王放還吾曰。以此奇事伝説人間。即説一偈云

若人造多罪　応堕地獄中　纔聞弥陀名　猛火為清冷

婆羅門憶持而再説。聞者歓喜矣

出典として示される「外国賢聖記」については未詳、阿輸沙国の婆羅門にその妻が「南無阿弥陀仏」と唱えることを勧める話である。『有善女物語』は大唐并州の話であるが、夫の名前にインドの階級を指す言葉である「婆羅門」の語が含まれるのは、この系統の説話に依拠したためかと推測される。妻が念仏の時に金鼓を鳴らし、その時夫も念仏を唱え、ともに寝屋に入るという点が『有善女物語』とは異なる。

次に、これらが、日本で受容された例を示す。

①には、『法華経直談鈔』巻三末二十一「南無仏功徳事　附女房夫勧念仏事」に、「経律異相ト云文ニ見タリ」として引用された例がある。この巻は、『妙法蓮華経』巻一方便品を説いており、方便品の「若人散乱心　入於塔廟中　一称南無仏　皆已成仏道」（岩波文庫『法華経』）の例話となっている。また、同じく『法華経』の注釈書である叡山文庫天海蔵『一乗拾玉抄』では、譬喩品を説く部分に類話がある。[3]「物語云」とあって、出典は示されていないが、『経律異相』と同じように、念仏のきっかけとなるのが戸口に吊した鈴の音であることから、①の系統であると考えられる。

②には、『法華百座聞書抄』天仁三年（一一〇九年）三月四日の譬喩品の説法に、用いられた例がある。

③の受容例は諸書に見ることができる。金沢文庫本『言泉集』亡夫帖（二帖之一）（『安居院唱導集』上、一三三頁）では、「依妻室教誘念仏免地獄縁　三宝感応録上（戒珠往生伝下載之）〈信婦言称阿弥陀仏名感応第九外国賢聖記〉」という見出しのもとに引用されている。また、聖聡の『大経直談要註記』（一四三三年）巻十七（『浄土宗全書』一三、二一三頁）、及び、『当麻曼荼羅疏』（一四三六年）巻三十（『浄土宗全書』一三、五九九頁）にも、「三宝感応録上云」と書名を明示した引用がある。『私聚百因縁集』巻三第十八話の「阿輸沙国婆羅門事〈有悪有善之事〉」は、典拠を明示しないが『三宝感応要略録』と同文である。表題に付記される「有悪有善之事」は、『有善女物語』の「有善女」や「有悪婆羅門」の名を想起させるが、この説話自体には、「有善」「有悪」の語が含まれていないことには留意する必要があろう。[4]また、『三国伝記』巻三第一話「信ニ婦ノ言ヲ称ヘテ阿弥陀仏ノ名号ヲ破テ地獄ヲ蘇生スル事」も典拠は示されないが、同書所収の他の『三宝感応要略録』関連説話と同様に、『三宝感応要略録』を脚色した話であると考えられる。

そして、『有善女物語』との関係で特に注目したいのは、『往生浄土伝』巻下第三十四話「阿輸沙国婆羅門信婦念仏往生浄土」である。本書は、宋の戒珠の『浄土往生伝』（一〇六四年頃）に仮託して日本で平安後期に作られた往生伝で、塚本善隆氏に詳細な研究がある。[5]『三宝感応要略録』とは文章までほぼ一致する共通説話が十あまりあり、塚本氏は、本書の依拠文献として『三宝感応要略録』の著者非濁（～一〇六三年）が撰述した『随願往生集』（二十巻、散逸。）

を想定されている。

左に、該当部分の本文を示した。『三宝感応要略録』との違いを明らかにするため、【対照表】として、両書を並べてある。(6) なお、本稿では、本書を『偽戒珠伝』と呼称する。

『偽戒珠伝』所収話は、『三宝感応要略録』とほぼ同じ文辞から成るが、内容的に、『有善女物語』に関わる大きな違いがある。『三宝感応要略録』は、傍線bに、「我修念仏定訖撃金鼓時」とあり、妻が念仏を終えて金鼓を鳴らす時に夫が「南無阿弥陀仏」と唱えるのに対し、『偽戒珠伝』は、傍線Bに、「黄昏撃楗椎時」とあり、夕暮れの鐘が鳴る時に念仏を唱える。また、『三宝感応要略録』は、傍線aに、「此婆羅門多欲愛婦情深染着不知厭足」、傍線cに、「入寝屋方交臥」とあり、婆羅門は妻に対する欲望が強く、寝屋に入ることを条件に念仏を唱えるが、『偽戒珠伝』には、そのような愛欲に関する記述はない。従って、『有善女物語』に最も近いのは『偽戒珠伝』であ

【対照表】

(戒) 昔天竺阿輸沙国　有一婆羅門愚痴不信悪業纏身其婦浄信解念仏定　勧夫曰汝可念無量寿仏夫不肯受之

(感) 昔天竺阿輸沙国中有一婆羅門愚痴不信悪業厳身其婦浄信解念仏定婦毎勧夫曰汝可念無量寿仏夫更不随　[a]此婆羅門多欲愛婦情深染着不

(戒)　婦曰夫妻鳥双羽車双輪也汝　不似我行　我亦不随汝　情　夫　曰　汝言将如何婦曰　定

(感) 知厭足時婦曰夫婦如双羽　汝如何不似我行既不随我心我亦不随汝　事不順情時婦婆羅門曰我愚痴故不能持汝行将如何婦曰汝定

(戒) 一時　念仏　即黄昏[B]撃楗椎時也　夫　如言而唱之　後依微疾而卒　五日方

(感) 一時我修念仏定訖[b]　撃金鼓時　将唱南無阿弥陀仏入寝屋[c]方交臥　婆羅門如言而行　経三年後依微疾而卒脇下尚暖婦疑不葬五日方

(戒) 活　謂婦曰吾死入鑊湯地獄羅刹婆以鉄杖　罪人誤動鑊縁即謂　鐘　声不覚高声唱南無阿弥陀仏尓時地獄如清涼池蓮花　満　声所

(感) 活悲泣謂婦言吾死入鑊湯地獄羅刹婆以鉄杖打罪人打動鑊縁即謂汝金鼓声不覚高声唱南無阿弥陀仏尓時地獄如　涼池蓮花弥満其中声所

(戒) 及罪人皆生浄土羅刹白王々　説　偈曰若人造衆罪応堕地獄中纔聞弥陀名猛火為清冷已墜地獄者聞名亦復然

(感) 及罪人皆生浄土羅刹白王々放還吾曰以此奇事伝説人間即説一偈云若人造多罪応堕地獄中纔聞弥陀名猛火為清冷

(戒) 於此大聖化非我所官事婆羅門具説此縁念仏往生浄土矣今見此感全同経中聞鈴称仏因縁迺知如斯感多矣

(感)　婆羅門　持憶而再説聞者歓喜矣

＊(戒)…『偽戒珠伝』、(感)…『三宝感応要略録』

るということになる。

以上検討した説話を比較したのが次の表である。

	男	女	生前の鐘	念仏
有善女物語	夫 有悪婆羅門	妻 有善女	暁・入相の鐘	南無阿弥陀仏
①経律異相	夫	妻	戸上の鈴	南無仏
法華経直談鈔	夫	妻	通る道の鈴	南無仏
一乗拾玉抄	夫	妻	戸口の鈴	一心不乱に念仏
②法華伝記	沙弥	ナシ	暁の揵槌	法華題目
法華百座聞書抄	沙弥	ナシ	暁の鐘	南無妙法蓮華経
③三宝感応要略録	阿輸沙国 婆羅門	妻	念仏時の金鼓	南無阿弥陀仏
三国伝記	阿輸沙国 婆羅門	妻	念仏時の金鼓	南無阿弥陀仏
偽戒珠伝	阿輸沙国 婆羅門	妻	黄昏槌椎	南無阿弥陀仏

生前に男が聞いた鐘の種類によって典拠を限定するのは難しいが、前述したように、大唐并州の話である『有善女物語』の夫の名に「婆羅門」という語が含まれるのは、この話が本来、③の系統であったためかと推測されることから、『有善女物語』の根幹には『偽戒珠伝』に近い説話があったと考えられる。

ところが、『偽戒珠伝』を直ちに『有善女物語』の出典として結びつけることには些か無理がある。『偽戒珠伝』の受容は、平安末期から鎌倉初期には多く見られるが、その時期に限られており、その後は近世まで確実な受容例がないのである。

『偽戒珠伝』が引用される最古の例は、十二世紀末、『覚禅抄』一「阿弥陀法下」（『大正新修大蔵経』図像四、七九頁）に「往生伝上云戒珠」として示される沙門顕晶伝である。その後、貞応三年（一二二四年）の慈円の四天王寺和歌讃（『法然上人行状絵図』巻十五、『言泉集』（金沢文庫本「忌日帖（三帖之一）」他）、宗性『春華秋月抄草』（巻二十一の読書記録、一二四八年）、良忠『選択伝弘決疑鈔』（一二五四年）、了慧『往生十因私記』（一三〇〇年）など、十三世紀頃の文献には多くの引用があることが指摘されている。[7] また、『宝物集』、『閑居友』、『発心集』などの説話にも『偽戒珠伝』が典拠であると考えられる話がある。[8] しかし、長西『浄土依憑経論章疏目録』（一二六〇年頃）では、本書は、真撰の戒珠『浄土往生伝』とは別に、「偽妄録」として分類されており、その頃から次第に排斥されていったと考えられている。[9] 『偽戒珠伝』の存在を再び確認できるのは、近世、戒珠『浄土往生伝』の刊行に際して「戒珠伝逸文」として付された『偽戒珠伝』の一部（『浄土宗全書』続一六、五〇頁）と、『法然上人行状絵図』に対する注釈である義山『円光大師行状翼賛』（一七〇三年）に用いられた例であるが、良本が見付けられなかったらしく、不完全である。[10] また、聖聡『当麻曼荼羅疏』（一四三六年）には、『偽戒珠伝』に拠ると推定される伝が幾つか引かれているが、「七巻抄」などを介しており、[11] 室町期に直接的に用いられていた形跡は今のところ確認できない。

従って、『有善女物語』が直接『偽戒珠伝』に拠っているとは言い難いが、『偽戒珠伝』がさかんに読まれたころ、本話も何らかの形で抄出され、それが『有善女物語』の母胎となったのではないかと思われる。

さて、本話は、信心のさほどない男が偶然の鉄杖の音に念仏を唱

えるところに面白みがあるが、その点を除いて近似した話が、実は、『往生要集』巻下（『日本思想大系　源信』三八六頁）に見られる。

優婆塞戒経云、善男子、我本往、堕邪見家、惑網自我蓋、我於尓時、名曰広利、妻名女、精進勇猛、度脱無量、十善化導、我於尓時、心生殺獠、貪嗜酒肉、懶堕懈怠、不能精進、妻時語我、止其獠殺、戒断酒肉、勤加精進、得脱地獄苦悩之患、上生天宮与一処、我於尓時、殺心不止、酒肉美味、不能割捨、精進之心、懶堕不前、天宮息意、地獄分受、我於尓時、居聚落内、近僧伽藍、数聞犍鐘、妻語我言、事事不能、聞犍鐘声、三弾指、一称仏、斂身自恭、莫生憍慢、如其夜半、此法莫廃、我即用之、無復捨失、経十二年、其妻命終、生忉利天、却後三年、我亦寿尽、経至断事、判我入罪、向地獄門、当入門時、声鐘三声、我即住立、心生歓喜、愛楽不厭、如法三弾指、長声唱仏、声皆慈悲、梵音朗徹、主事聞已、心甚愧感、此真菩薩、云何錯判、即遣追還送、往天上、既往到已、五体投地、礼敬我妻白言、大師、幸義大恩、如見済抜、乃至、菩提不違教勅〈已上〉

現在の『優婆塞戒経』にはこの話は見られない。夫の死より妻の死が先であり、蘇生せず天上で夫婦が出会う点、地獄で念仏を唱える契機となる鉄杖や釜の音について記されない点など、根本的な部分で異なるため、『有善女物語』の根幹説話とはならないが、妻の勧めで鐘が鳴ると念仏を唱えていた男が地獄でも念仏を唱え往生するという趣向は同じである。また、男が殺生を好み、それをやめられなかった点は、特に、『有善女物語』と共通しており、本話が『有善女物語』或いはその典拠となった説話に影響を与えた可能性も考えられる。

なお、良忠（一一九九～一二八七年）『往生要集義記』（『浄土宗全書』一五、三三二頁）は、本話について、「鐘声等ト者地獄ノ苦器互ニ触テ出レ声ヲ其ノ声似タリレ鐘」と注している。しかし、『往生要集』には、「地獄ノ苦器互ニ触テ」に相当する内容は記されていない。また、男の念仏する様子について、「心生歓喜、愛楽不厭、如法三弾指、長声唱仏、声皆慈悲、梵音朗徹」とあり、阿輸沙国婆羅門の話のように不信心な男が偶然に念仏を唱えた話であるとは捉えにくい。良忠の注は、前に検討した形の説話を念頭に置いて記されたかと思われる。

二　阿輸沙国婆羅門説話と『観無量寿経』

男が偶然の念仏によって救われる点に重心のある阿輸沙国の婆羅門の話に対し、『有善女物語』は、妻の方が中心となり、妻が夫を信仰の道に誘う物語となっている。冒頭も、

大唐ノ并州トイフ国ニ、有善女トイフ女アリ、コノ女房ニアヒトモナヘル男、有悪婆羅門トイフ居士アリ

とあり、婆羅門ではなく有善女の紹介から始まっている。有善女は、

仏法ノオキテニハ、ミツカラ、ヨク信シテノウヘニ人ヲヲシヘテ、信セシムルヲ、大悲ノキハマリトス

と言って、夫を信仰に導く。物語では典拠は示されないものの、この部分は、善導の『往生礼讃偈』（『大正新修大蔵経』四七、四四二頁）に見られる言葉、

南無至心帰命礼西方阿弥陀仏
自信教人信　難中転更難　大悲伝普化　真成報仏恩　願共
諸衆生　往生安楽国

に拠ると考えられ、有善女が善導の教えを受けたという設定に適う。

物語の末尾にも、

自、信シテ、行セン人ハ、他人ヲス丶メテ、念仏セシムヘシ、コレヲ、経ニハ、大悲ヲツタフル人ト、ナツケ、釈ニハ、真ニ、仏恩ヲ報スル人ナリト、云云

と記されており、首尾一貫して、有善女が夫に念仏を勧める話として展開している。阿輸沙国婆羅門の説話と比較して、女性である妻の方に重心が置かれている理由は、談義の目的とも関わると思われるため、次章で改めて考察するが、念仏を唱えた本人ではなく彼を導く人物の側を中心とする物語構成には、本説話が『観無量寿経』と密着して理解される環境も影響したのではないかと思われる。

『観無量寿経』で九品の往生を説く箇所のうち、下品中生の往生には次のようにある。[12]

仏告阿難及韋提希、下品中生者、或有衆生、毀犯五戒八戒、及具足戒。如此愚人、偸僧祇物、盗現前僧物、不浄説法、無有慚愧、以諸悪業、而自荘厳。如此罪人、以悪業故、応堕地獄。命欲終時、地獄衆火、一時俱至、遇善知識、以大慈悲、為説阿弥陀仏、十力威徳、広説彼仏、光明神力、亦讃戒定慧解脱知見。此人聞已、除八十億劫、生死之罪。地獄猛火、化為清涼風、吹諸天華。華上皆有化仏菩薩、迎接此人。如一念頃、即得往生、七宝池中、蓮華之内。経於六劫、蓮華乃敷。当華敷時、観世音大勢至、以梵音声、安慰彼人、為説大乗甚深経典。聞此法已、応時即発無上道心。是名下品中生者。

『観無量寿経』に親しんだ者ならば、前記の説話を下品の者の往生に引きつけて考えるのはごく自然なことであったと思われる。再度の引用となるが、『偽戒珠伝』には次のような言葉が用いられている。

・不覚高声唱南無阿弥陀仏、尓時地獄如清涼池、蓮花満、声所及、罪人皆生浄土

・若人造衆罪、応堕地獄中、纔聞弥陀名、猛火為清冷[13]

この説話が『観無量寿経』の下品の往生と結び付くことは、本説話の他書への引用例からも確認できる。例えば、『当麻曼荼羅疏』では巻三十「散善義八　下品上生」に「三宝感応録上」が引用されている。また、「経律異相」を引用する『法華経直談鈔』巻三末第二十一話に続く第二十二話は「観経下三念仏事」となっている。『往生要集』や『一乗拾玉抄』の例も下品の往生に関連付けて説かれている。次に示す『有善女物語』の地獄にいる夫が念仏を唱えた時の描写にも、『観無量寿経』の世界がイメージされるだろう。

南無阿弥陀仏、[14]イフトキニ、地獄ノ猛火、化生シテ、清涼ノ風ト、釜ノウチ、俄ニスヽシキ、池ト変シテ、五色ノ蓮華、イロ〳〵ニ、サキミタレケレハ

無量ノ罪人、コト〳〵ク、ウカミアカリテ、一一ニ、菩薩ノ形ト、ナリテ、青黄赤白ノ、花ノ台ニ、坐セリ、天ニハ、音楽奏シテ、珍妙ノ華、フリミツ

『有善女物語』には次のようにも記されている。

イカニ、イハンヤ、観無量寿経ニハ、五逆ノ、罪人ナレトモ、善知識ノ、スヽメニヨリテ、弥陀ノ名号ヲ、称スルモノハ、一念ニ、八十億劫ノ、生死ノ重罪ヲ滅シテ、金蓮華ニ乗シテ、極楽ニ往生スト、トケリ

『観無量寿経』では、中品下生から下品下生までの四品の往生に、それぞれ「遇善知識」が説かれ、往生には善知識の勧化が重要であ

ると述べられている。『有善女物語』では、妻が夫の善知識として存在することが明記されている。

・ハラモンハ、廿五、女房ハ、十九ニテ、俄ニ、サマヲ、カヘテ、タカヒニ、コレヲ善知識トシテ、ウチツレテ、ワカイヘニ、カヘリヌ

・妻ノ有善女モ、イヨ〳〵大信心ヲカタメ、見聞ノ道俗、マス〳〵、念仏往生ノ、本願ニ帰シテ、有善女ヲ、善知識トタノミテ、イツレモ素懐ヲトケニケリ

善知識としての妻が強調される『有善女物語』には、特に、下品の往生には善知識が重要であるという『観無量寿経』に対する理解のあり方を読み取ることができるだろう。

三　『有善女物語』と女人教化

『有善女物語』は、真宗の寺院で多く享受されていた。以下のような写本が伝わる。

①慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本…室町後期写。粘葉装、一帖。黒菱形模様表紙。縦二一・〇糎、横一五・三糎。三二丁。一面五行、一行一六字程度。内題、外題なし。赤木文庫旧蔵。『室町時代物語大成』二所収。

②慶應義塾図書館蔵本…室町末期写。粘葉装、一帖。茶表紙。縦二三・四糎、横一六・一糎。三〇丁。一面五行、一行二〇字程度。内題「有善女物語」。外題なし。最終丁に「江州／栗本出庭／西光寺」とある。西光寺は、滋賀県栗太郡栗東町の真宗大谷派寺院。文明十七年（一四八五年）、慶宣開基（滋賀県栗太郡役所編『近江栗太郡志』五、一九二六年）。

③龍谷大学図書館蔵本…室町末期写。袋綴、一冊。共表紙（保護表紙あり）。縦二〇・〇糎、横一五・七糎。二八丁。一面六行、一行一五字程度。内題なし。外題、共表紙左肩題簽「婆羅門」。本願寺旧蔵。宮崎圓遵氏「中世における唱導と談義本」（『宮崎圓遵著作集七　仏教文化史の研究』思文閣出版、一九九〇年（初出一九三八年））に、「本派本願寺に室町時代末期の写本を蔵している。」と紹介されている『婆羅門』が、本書に当たるか。本願寺史料研究所で調査していただいたが、現在、西本願寺では同書の所在は確認できないとのことである。

④龍谷大学図書館蔵本…彦根市高宮円照寺（浄土真宗本願寺派）本の大正十四年転写本。「江州円照寺本ヨリ転写ス／大正十四年十二月」とある。袋綴、一冊。茶表紙。縦二六・九糎、横一八・八糎。二二丁。一面六行、一行二〇字程度。内題「有悪有善物語」。外題、表紙左肩題簽「有悪有善物語」。『真宗史料集成』五所収。

⑤大分市専想寺（浄土真宗本願寺派）蔵本…文明三年（一四七一年）天然浄祐書写。[14] 袋綴（仮綴）、一帖。縦一四・三糎、横二〇・〇糎。『女人往生聞書』『恵心僧都事』と合冊された懐中本。全四一丁（本話七丁分）。本話の内題は「大唐平州男女因縁」、外題は「唐平州男女事」、尾題は「唐平州男女因縁集」。『愛知県立大学文学部論集（国文学科編）』三七（一九八八年）に黒田彰氏による影印、略解題。

何れも漢字片仮名交じりの表記である。①～④は、楷書で記されており、全体に亙って漢字に振り仮名がある。これは、御文章などの真宗の聖教類に通じる形態である。慶應義塾図書館蔵天正十一年（一五八三年）写本『為盛発心因縁集』（『室町時代物語大成』九）

や神宮文庫蔵室町末期写本『大仏供養物語』（『室町時代物語集』四）などの真宗談義本の伝本も同様である。同じような場で享受された物語であると考えられるだろう。

⑤は、「説経僧の懐中する手控えとして消耗品の性格を有し（仮綴、小型本）」ており（黒田氏前掲解題）、本文は、他本より短く、やや異なっている。宮崎圓遵氏「九州真宗の源流」（『宮崎圓遵著作集七仏教文化史の研究』（初出一九五〇年））に次のような指摘がある。

彼が右の三書を一冊に書写した意図はおそらく女人往生を勤説する素材を取り纏めるためであったと思われる。すなわち女人往生に関する教説として『女人往生聞書』を、またその因縁説話として『大唐平州男女因縁』『恵心僧都事』の二書をとりあげたのであろう。

本物語が女人の教化に関する物語として理解されていたことは、このような伝本によっても裏付けられる。談義を通して物語を享受する人々は、必ずしも女性ばかりとは限らないだろうが、『有善女物語』は、「ミツカラ、ヨク信シテノウヘニ人ヲヲシヘテ、信セシムル」ことを実践する物語であり、有善女の教化を受けるのみの人物として描かれる有悪婆羅門の話ではない。物語の享受者には、有善女のような信仰心のある人たちが想定され、その多くは女性だったのではないだろうか。

そこで、本物語における女人教化の方法について考察する。中世の談義や物語においては、女人の罪業観や不浄観が説かれるのは珍しいことではないが、夫を念仏の道に導くような信仰の篤い女性を描く物語でありながらも、他の談義本などと同じく、女人の罪業観を植え付けようとする意識が見られることに注意したい。

例えば、『有善女物語』には、

妻子ハ、身ノアタナレトモ、仏法ヲスヽムルトキハ、コレ真ノ、善知識ナルユヘニ、妙荘厳王モ、仏ヲ、オカミタマヘリ

という『妙法蓮華経』巻八妙荘厳王本事品を踏まえた記述がある。この部分は、表向きには、夫有悪婆羅門の側に立って、身のあだとなる妻子も時には善知識になると説いている。しかし、物語の享受者の多くが有善女のような信心深い女性であるとすれば、この言葉は彼女らに向けられていることになる。抑も、「妻子ハ、身ノアタナレトモ」は、妻の有善女が中心となる物語には不要な言葉である。殊更に、享受者に対して女性の罪障を意識させていると言えよう。また、物語の前半には、

善導和尚ノ、オンコトハニ、世ハミナ、悪人ナリトイヘトモ、コトニ女ハ、悪業フカキモノナリ、汝、イカナル悪人悪縁ニアフトカ、トモニ、地獄ニオチンスラン、不便サヨト、オホセラレテ、オンカナシミ、アリシナリ[15]

と、有善女自身に「女ハ、悪業フカキモノ」と語らせる箇所があるが、物語中の女性に罪業観を自覚させることで、同時に、物語の享受者にも女性の罪障を意識させようとしていると考えられる。

『有善女物語』は、信心深い女性を主人公として描くことによって享受者の共感を誘ったと思われるが、そのことが、かえって、女人罪業観を浸透させ易くしていると思われる。それは、談義をする側が意図したところだったのではないか。女人教化の問題として捉えるとともに、談義の方法としても考える必要があるだろう。

おわりに

『有善女物語』は、阿輪沙国の婆羅門の説話と比較すると、妻に焦点を当てた物語である。本稿では、本物語における女人教化の方法を考察するとともに、『有善女物語』が生成する背景を、源泉説話の享受という視点から捉えた。

鐘が鳴ると反射的に念仏を唱える男の話は幾つもの形で伝えられており、かなり知られた話であったかと思われる。『有善女物語』は『偽戒珠伝』所収話に最も近いと考えられるが、他の説話の影響も全くなかったとは言えまい。善知識としての妻が強調される『有善女物語』には、下品の往生には善知識の存在が重要であるという『観無量寿経』に対する理解を読み取ることができるが、この説話に下品の往生を結び付ける解釈は本物語に限らない。特に、寺院においては、本説話は、『観無量寿経』に密着して理解されており、『有善女物語』は、その理解基盤の上に生成した物語であると考えられる。

注

(1) 『有善女物語』の本文引用は、『室町時代物語大成』二（斯道文庫蔵本）に拠る。

(2) 『宝物集』のような言い方は経典、説話集などに多く見られる。また、本稿で扱う『偽戒珠伝』は并州の者の往生を多く採録している。

(3) 『一乗拾玉抄　影印』（臨川書店、一九九八年）二二五頁。

(4) 『私聚百因縁集』は正嘉元年（一二五七年）の跋文を持つが、伝存するのは、承応二年（一六五三年）刊本のみである。『有善女物語』には、『有悪有善物語』と題する伝本もある。

(5) 塚本善隆氏「日本に遺存せる遼文学とその影響――真福寺の『戒珠集往生浄土伝』と金沢文庫の『漢家類聚往生伝』について――」（『塚本善隆著作集六　日中仏教交渉史研究』大東出版社、一九七四年（初出一九三六年））。本稿では、他に、大谷旭雄氏「戒珠集『往生浄土伝』と法然」（『大正大学研究紀要』七八、一九九三年三月）、清水宥聖氏「偽撰『戒珠集』とその影響」（大正大学国文学会編『文学と仏教第一集　迷いと悟り』出版教育センター、一九八〇年）、小峯和明氏「金言類聚抄について――仏典類書の成立――」（『仏教文学』六、一九八二年二月）などを参照した。なお、塚本氏の研究では、名古屋市真福寺蔵の建長六年（一二五四年）乗忍書写本（嘉禄三年（一二二七年）の本奥書を有す。）のみが扱われているが、現在では、名古屋市七寺の写本も確認されている。落合俊典氏にその複写を見せていただいた。記して深謝申し上げる。真福寺蔵本に百十五話が収められるのに対し、七寺蔵本には、真福寺蔵本の上十九話、中十八話、下二十四話にあたる計六十一の説話が、真福寺蔵本と同じく三帖にわけて収められている。ともに「往生浄土伝　桑門戒珠集」の題がある。七寺蔵本には「阿輪沙国婆羅門信婦念仏往生浄土」は含まれていない。なお、同書は、落合俊典氏編『七寺古逸経典研究叢書』五（大東出版社、近刊）で紹介されるとのことである。

(6) 塚本氏注(5)前掲書に収められる真福寺蔵本の翻刻に拠る。但し、国文学研究資料館の真福寺蔵本マイクロフィルムに拠って一箇所訂正した。

(7) 塚本氏、大谷氏、清水氏注(5)前掲論文。

(8) 清水氏注(5)前掲論文に、『宝物集』巻四僧弼の説話、『発心集』第六「宝日上人、和歌を詠じて行とする事」の曇融説話（但し、『言泉集』にも引用あり。）などについての指摘がある。

(9) 塚本氏注(5)前掲論文。

(10) 塚本氏注(5)前掲論文。抄出や誤脱の箇所を検討すると、『円光大師行状翼賛』に用いられたのは七寺蔵本に近い本文を持つ伝本だったかと思われる。

(11) 塚本氏注(5)前掲論文。

(12) 引用は岩波文庫『浄土三部経』に拠る。下品のうち中生のみを示したのは紙幅の都合に拠るものであり、特に限定するわけではない。

(13) この偈頌は『観世音菩薩往生浄土本縁経』に「釈迦牟尼仏讃阿弥陀説偈曰」として掲げられる比較的知られていたものである。『大経直談要註記』巻九（『浄土宗全書』一三、一二一頁）や『私聚百因縁集』巻一第十八話「中天竺一婆羅門事」にも、「浄土本縁経云」と引用されている。

(14) 天然は専想寺の開基。文明元年（一四六九年）、曹洞門から浄土宗鎮西派へ転じて京都の黒谷金戒光明寺に入り、文明六年に豊前、同八年に筑

後へと下り、後、真宗に親しんだ。専想寺には天然の書写した談義本が多く伝わる。（宮崎圓遵氏「九州真宗の源流」）

(15) 出典未勘。但し、善導の『依観経等明般舟三昧行法往生讃（般舟讃）』（『大正新修大蔵経』四七、四五〇頁）には、「父母妻児百千万　非是菩提増上縁　念念相纏入悪道　分身受報不相知」とある。また、善導は、『観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門（観念法門）』（『大正新修大蔵経』四七、二七頁）で、『無量寿経』に示される阿弥陀の誓願の第三十五願（女人往生願）を説く中に、「今或有道俗。云女人不得生浄土者。此是妄説。不可信也」と述べている。

本稿は平成十二年度大阪大学国語国文学会（平成十二年一月二十二日、於大阪大学）における口頭発表に基づく。席上ご教示を賜った諸先生方に御礼申し上げる。また、貴重な典籍の閲覧をご許可いただいた慶應義塾図書館、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、龍谷大学図書館に感謝申し上げる。

――本学大学院博士後期課程――